

磐梯町地域防災計画 (火山対策計画)

磐梯町防災会議

令和4年 月

目 次

第 6 章	火山対策計画	1
第 1 節	総則	1
第 2 節	災害予防対策	2
第 1	防災のための体制整備及び事業等の推進	2
第 2	噴火警報等	2
第 3	火山災害予防措置	11
第 3 節	災害応急対策	13
第 1	火山災害応急活動体制	13
第 2	火山災害応急措置	14
第 4 節	災害復旧	18

第 6 章 火山対策計画

第 1 節 総則

1 目的

本章は、災害対策基本法（昭和 36 年法律第 223 号）第 42 条 及び活動火山対策特別措置法（昭和 48 年法律第 61 号）第 6 条の規定に基づき、常時観測火山である磐梯山において、火山災害が発生した場合にとるべき火山災害応急対策を中心に火山防災対策に係る措置、火山防災対策上緊急に必要とされる施設等の整備、火山災害に係る防災訓練、火山防災上必要な教育及び広報に関する事項等について定めたものであり、これを推進することにより住民の生命、身体及び財産を火山による災害から保護することを目的とする。

なお、本章で定めのない事項については、本計画第 1 章「総則」、第 2 章「災害予防計画」、第 3 章「災害応急対策計画」及び第 4 章「災害復旧・復興計画」の定めるところによるものとする。

2 火山対策計画の指針

- (1) 本章は、火山災害の発生に伴う被害を防止し、軽減するため、町及び防災関係機関の講ずべき措置を定めるものとする。
- (2) 本章は、火山災害発生時における応急対策を中心に作成するものとし、併せて教育、広報、訓練及び緊急整備事業等の平常時における対策についても計画化する。
- (3) 本章は、防災関係機関等とともに引き続き研究協議し、検証を行い、計画内容の充実を図るものとする。

3 磐梯山の概要

磐梯山は、猪苗代湖の北に位置する底径 7 ～ 10 km、比高 1 km の安山岩質の成層火山である。赤埴山（あかはにやま）、大磐梯、櫛ヶ峰などが沼ノ平火山を取り囲んで、円錐形火山体が形成されているが、過去に山体崩壊が何度か繰り返されて現在の山容となった。

磐梯山の活動は、休止期をはさんで新旧 2 つに大きく分けられる。古期の活動では主に赤埴山や櫛ヶ峰が形成され、新期の活動では南麓に翁島岩屑なだれと軽石流を堆積させた。崩壊跡地の馬蹄形カルデラ内には、その後に再び山体が形成された。主なマグマ噴火は数万年前には停止して、その後は水蒸気爆発の活動へと移行した。

有史以来最大の噴火は、1888 年（明治 21 年）7 月 15 日午前 7 時 45 分に発生した「磐梯山噴火」で被害は、埋没家屋 45 戸、潰壊家屋約 418 戸、死者 477 名、負傷者約 518 名、被害面積約 11, 124 ヘクタールに及んだ。

第 2 節 災害予防対策

火山による被害を最小限にとどめるため、火山防災に関する体制の整備及び防災知識の普及等について定め、その実施を図るものとする。

第 1 防災のための体制整備及び事業等の推進

(主管) 総務課、建設課、農林課

1 防災体制の整備

- (1) 警戒区域の設定
気象庁が発表する噴火警報等（噴火警戒レベルを含む。）に応じた警戒区域の設定等を行い、住民等への周知に努めるものとする。
- (2) 災害対策本部又は現地本部の設置
災害対策実施上必要と認めるときは、町災害対策本部等を設置して、災害対策に万全を期する。
- (3) 噴火警報等の伝達
関係機関及び住民等に対し、県から通報される噴火警報等の周知徹底を図るものとする。
- (4) 避難指示等の伝達及び監視
火山現象により町長が発する避難の指示を住民、登山者及び観光客に伝達する方法及び体制並びに監視のための体制を整備しておくものとする。
特に噴火警戒レベルに応じた立ち入り規制区域の設定や住民避難計画を作成する。
なお、伝達に当たっては、高齢者、障がい者等の要支援者に十分配慮する。

2 防災事業等の推進

町は、火山災害による被害を防止又は軽減するため、必要に応じ次の事業等の推進を図るものとする。

- (1) 避難施設（退避舎、退避壕、退避広報施設等）の整備
- (2) 防災倉庫施設の整備
- (3) 降灰除去事業
- (4) 治山治水事業
- (5) 砂防事業
- (6) 河川の水質汚濁防止措置
- (7) 火山現象の調査、研究及びその成果の普及

なお、活火山法の規定に基づく「避難施設緊急整備地域」又は「降灰防除地域」の指定を受けた場合は、活火山法第 14 条及び第 19 条の規定に基づく整備計画を作成する。

第 2 噴火警報等

(主管) 総務課、政策課

1 噴火警報等の種類

活火山である磐梯山の噴火警報等の種類は、以下のとおりである。

- (1) 噴火警報
仙台管区气象台が、噴火に伴って発生し生命に危険を及ぼす火山現象（大きな噴石、火砕流、融雪型火山泥流等、短時間で火口周辺や居住地域に到達し、避難までの時間的猶予がほとんどない火山現象）の発生が予想される場合やその危険が及ぶ範囲の拡大が予想される場合に、警戒が必要な範囲（生命に危険を及ぼす範囲）を明示して発表する。
なお、警戒が必要な範囲に居住地域が含まれる場合は「噴火警報（居住地域）」、火口周辺に限られる場合は「噴火警報（火口周辺）」として発表される。噴火警報（居住地域）は、

警戒が必要な居住地域を含む市町村に対する火山現象特別警報に位置づけられる。

(2) 噴火予報

仙台湾気象台等が、火山活動の状況が静穏である場合、あるいは火山活動の状況が噴火警報には及ばない程度と予想される場合に発表する。

(3) 火山の状況に関する解説情報

噴火警戒レベルの引き上げ基準に現状達していないが、今後の活動の推移によっては噴火警戒レベルを引き上げる可能性がある」と判断した場合、または判断に迷う場合に、「火山の状況に関する解説情報（臨時）」を発表する。

また、現時点では、噴火警戒レベルを引き上げる可能性は低い、火山活動に変化がみられるなど、火山活動の状況を伝える必要がある」と判断した場合には、「火山の状況に関する解説情報」を発表する。

(4) 噴火警戒レベル

火山活動の状況に応じた警戒が必要な範囲と防災関係機関や住民等がとるべき防災対応を踏まえて 5 段階に区分したもので、噴火警報・噴火予報に含めて発表される。

磐梯山の噴火警戒レベルは以下のとおり。

磐梯山の噴火警戒レベル表

種別	名称	対象範囲	レベル・キーワード	火山活動の状況	住民等の行動及び登山者・入山者等への対応	想定される現象等
特別警戒	噴火警戒報（居住地域）又は噴火警戒報	居住地域及びそれより火口側	5・避難	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫している状態にある	危険な居住地域からの避難等が必要	<ul style="list-style-type: none"> ・火口から概ね4km以内の居住地域に大きな噴石が飛散するような噴火が発生、あるいは切迫している。 ・火砕流・火砕サージ、融雪型火山泥流が居住地域まで到達、あるいはそのような噴火が切迫している 【過去事例】 1888年7月15日の噴火
			4・ <u>高齢者等避難</u>	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される（可能性が高まっている）	警戒が必要な居住地域での避難準備、要支援者の避難等が必要	<ul style="list-style-type: none"> ・火口から概ね4km以内の居住地域に大きな噴石が飛散するような噴火の可能性。 ・火砕流・火砕サージ、融雪型火山泥流が居住地域に影響を及ぼす噴火の可能性。 【過去事例】 有史以降の事例なし
警戒	噴火警戒報（火口周辺）又は火口周辺警戒報	火口から居住地域近くまで	3・入山規制	居住地域の近くまで重大な影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される	住民は通常的生活状況に応じて要支援者の避難準備 登山禁止・入山規制等危険な地域への立入規制等	<ul style="list-style-type: none"> ・火口から概ね2 km以内に噴石飛散、火砕流・火砕サージが流下するような噴火の発生、またはその可能性。 ・火口から居住地域近くまで、融雪型火山泥流が到達、またはその可能性。 【過去事例】 有史以降の事例なし
		火口周辺	2・火口周辺規制	火口周辺に影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される	住民は通常的生活 火口周辺への立入規制等、 <u>状況に応じて特定地域の避難等</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・火口から概ね1 km以内に大きな噴石が飛散するような噴火の発生、またはその可能性 【過去事例】 2000年8月15日：日別地震回数476回、有感地震発生、GNSSによる地殻変動に若干の変化、入山規制、磐梯山ゴールドライン規制
予報	噴火予報	火口内等	1・ <u>活火山であることに留意</u>	火山活動は静穏 火山活動の状態によって、火口内で火山灰の噴出等が見られる（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）	状況に応じて火口内への立入規制等、 <u>特定地域の避難の準備等が必要</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動火山は静穏。 ・状況により火口内に影響する程度の火山灰や火山ガス等の噴出。

注1）特定地域とは、居住地域よりも磐梯山の想定火口に近い所に位置する集客施設が含まれる地域を指す。居住地域より早期に避難等の対応が必要となる場合がある。

注2）融雪型火山泥流は積雪期のみ想定される。

(5) 降灰予報

気象庁は、以下の 3 種類の降灰予報を提供する。

ア 降灰予報（定時）

- ・ 噴火警報発表中の火山で、噴火により人々の生活に影響を及ぼす降灰が予想される場合に、定期的に（3 時間ごと）に発表する。
- ・ 1 8 時間先（3 時間区切り）までに噴火した場合に予想される、降灰範囲や小さな噴石の落下範囲を提供する。

イ 降灰予報（速報）

- ・ 噴火が発生した火山※1 に対して、事前計算した降灰予報結果の中から最適なものを抽出して、噴火発生後 5 ～ 1 0 分後に発表する。
- ・ 噴火発生から 1 時間以内に予想される、降灰量分布や小さな噴石の落下範囲を提供する。

※1 降灰予報（定時）を発表中の火山では、降灰への防災対応が必要となる「やや多量」以上の降灰が予想された場合に発表する。

降灰予報（定時）が未発表の火山では、噴火に伴う降灰域を速やかに手伝えるため、予測された降灰が「少量」のみであっても必要に応じて発表する。

ウ 降灰予報（詳細）

- ・ 噴火が発生した火山※2 に対して、降灰予測計算（数値シミュレーション計算）を行い、噴火後 2 0 ～ 3 0 分程度で発表する。
- ・ 噴火発生から 6 時間先まで（1 時間ごと）に予想される降灰量分布や、降灰開始時刻を提供する。

※2 降灰予報（定時）を発表中の火山では、降灰への防災対応が必要となる「やや多量」以上の降灰が予測された場合に発表。

降灰予報（定時）未発表の火山では、噴火に伴う降灰域を速やかに伝えるため、予測された降灰が「少量」のみであっても必要に応じて発表。

降灰予報（速報）を発表した場合には、予想降灰量によらず、降灰予報（詳細）も発表する。

降灰量段階と降灰の厚さ

降灰量階級	予想される降灰の厚さ
多量	1 mm 以上
やや多量	0.1 mm 以上 1 mm 未満
少量	0.1 mm 未満

(6) 火山ガス予報

仙台管区气象台が、居住地域に長時間影響するような多量の火山ガスの放出がある場合に、火山ガスの濃度が高まる可能性のある地域を発表する。

(7) 火山現象に関する情報

仙台管区气象台が、噴火警報・予報、火山の状況に関する解説情報、降灰予報及び火山ガス予報以外に、火山活動の状況等をお知らせするために発表する。

ア 火山活動解説資料

写真や図表等を用いて火山活動の状況や防災上警戒・注意すべき事項等について解説するため、臨時及び定期的に発表する。

イ 月間火山概況

前月一ヶ月間の火山活動の状況や警戒事項を取りまとめたもので、毎月上旬に発表する。

ウ 噴火に関する火山観測報

噴火が発生した時や、噴火に関する情報（噴火の発生時刻・噴煙高度・噴煙の流れる方向・噴火に伴って観測された火山現象等）を噴火後直ちにお知らせするために発表する。

エ 噴火速報

仙台管区气象台が、登山者や周辺の住民に対して、火山が噴火したことを端的にいち早く伝え、身を守る行動をとってもらうために発表する。

噴火速報は以下のような場合に発表する。

- ・噴火警報が発表されていない常時観測火山において、噴火が発生した場合。
 - ・噴火警報が発表されている常時観測火山において、噴火警戒レベルの引き上げや警戒が必要な範囲の拡大を検討する規模の噴火が発生した場合。
 - ・このほか、社会的な影響が大きく、噴火の発生を速やかに伝える必要があると判断した場合。
- ※噴火の規模が確認できない場合は発表する。なお、噴火の発生を確認するにあたっては、気象庁が監視に活用しているデータだけではなく、関係機関からの通報等も活用する。

2 伝達気象官署

磐梯山の噴火警報等は、仙台管区気象台が発表し、福島地方気象台を通じて伝達される。

3 伝達系統

(1) 登山者等の避難誘導

登山者等に対して防災無線、ラジオ等報道機関、磐梯山火山警報装置（サイレン）等により、下山を呼びかける。

(2) 下山者への対応

警察等と連携し、登山届をもとに主な登山口における下山者の安否確認を行う。また、噴火警戒レベルの引上げにより、予定外の登山口に下山した登山者等を各登山口や避難所へ搬送する。

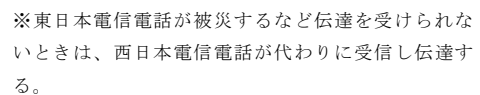
(3) 噴火警報等の伝達系統図

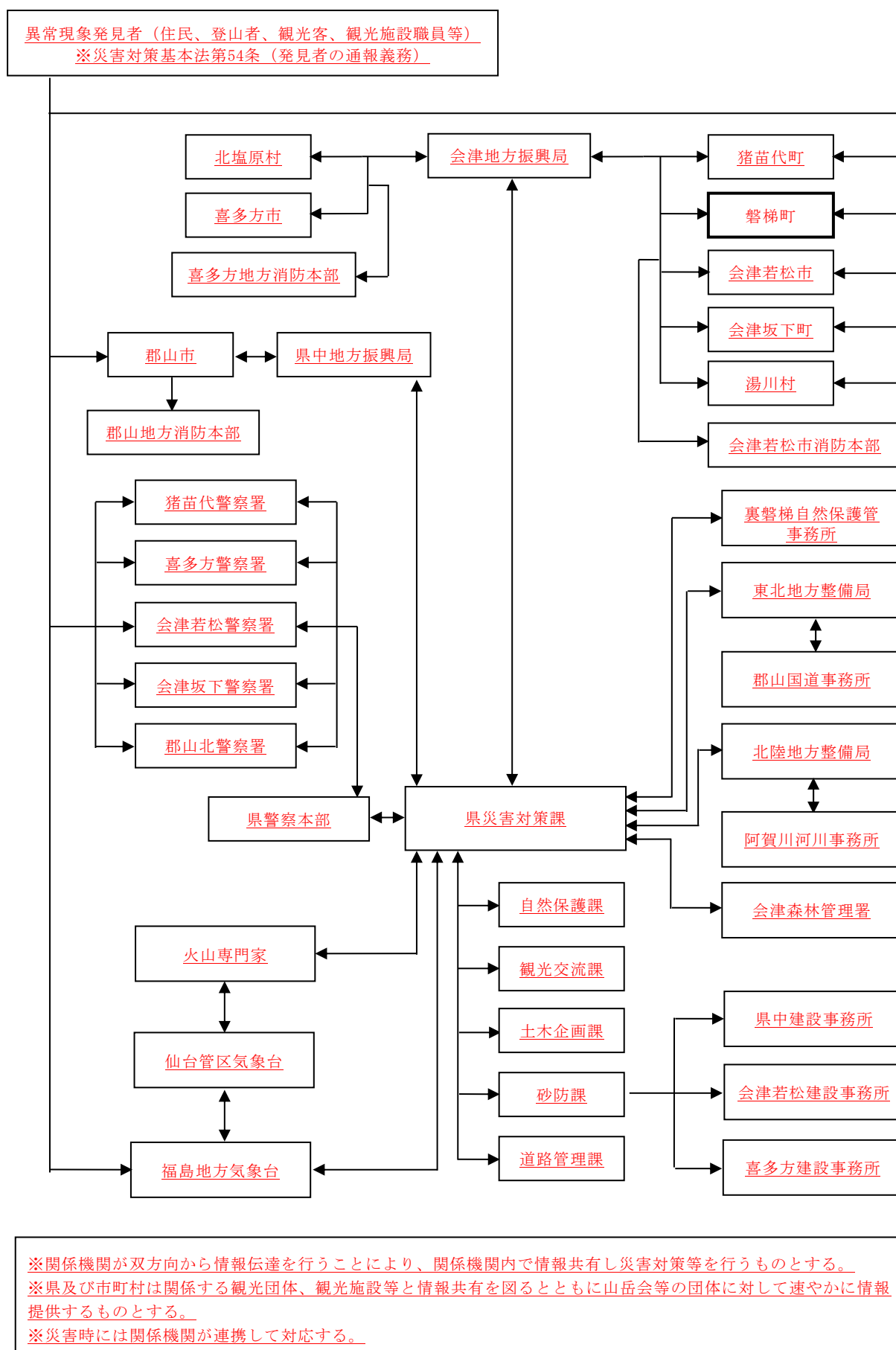
噴火警報等は、次の伝達系統図に従い周知を図るものとする。

特に、噴火警報（居住地域）は、火山現象による災害から、人の生命及び身体を保護するために通報されるものであって特に緊急を要するものであるから、伝達については迅速かつ的確に取り扱うものとする。

町は県から噴火警報を受領したときは、防災関係機関及び住民等に対して伝達するとともに、火山災害防止対策上必要な措置を講ずるものとする。

磐梯山の噴火警報等の伝達系統





第 3 火山災害予防措置

(主管) 総務課、農林課

1 危険防止設備の整備

町は、火山地域において、危険が予想される場所等の注意を喚起する立看板を設置し、又は当該地域に立入りを規制する設備等の整備を図るものとする。

2 火山現象の知識の啓発

(1) 住民等に関する啓発

町は、火山地域の住民、登山者及び観光客等に対して危険防止のための知識の啓発を行うとともに、県観光物産交流協会、観光協会及び交通会社その他の火山地域にかかる関係機関に啓発について協力を要請する。

特に町は、異常現象を発見した場合の通報義務について啓発を図るものとする。

また、火山性ガスの噴出地帯などの危険箇所については、立看板を設置するなど、住民、登山者、観光客等へ周知を図るものとする。

(2) 防災関係機関の協力

防災関係機関は、注意喚起のため標識の掲示、チラシの配付、車内放送等その所掌業務に基づき、住民、登山者、観光客等に対して、危険防止のための知識の啓発を行うほか、県又は町から啓発について応援要請があった場合はこれに協力する。

3 訓練の実施

(1) 防災訓練

町は、防災関係機関及び住民等に参加を求め、火山災害の防止又は軽減を図るため防災訓練を実施する。訓練を行うに当たっては、ハザードマップや噴火シナリオ等を活用して被害の想定を明らかにするとともに、実施時間を工夫するなど様々な条件を設定し、参加者自身の判断も求められる内容を盛り込むなど実践的なものとなるよう工夫する。なお、広域避難を想定する場合は、避難先の市町村にも参加を求める。

(2) 通信訓練

町は、火山災害の特殊性を考慮して、防災関係機関等に参加を求め、各種情報の収集及び通信等にかかる通信体制の確立を期するため、通信訓練を実施する。

4 危険区域の明示

町は、県及び関係機関と連携し、過去の噴火の状況等に基づき、災害の発生が予想される区域を把握するとともに、火山災害に関する火山災害予想区域図（ハザードマップ）により、警戒避難対策等を明示し、住民等への情報提供を効果的に行うものとする。なお、居住地域における避難対象地域は「磐梯山の火山活動が活発化した場合の避難計画」に定めるものとする。

5 特定地域の選定

想定火山からの距離や避難経路の状況、その他地域の実情を踏まえ、他の居住地域よりも早い（噴火警戒レベルが低い）段階で避難の対応を要する特定地域は、以下のとおりとする。

対象地域	噴火警戒 レベル	避難対応	影響を受ける 火山現象	早期避難を 要する理由等
星野リゾート アルツ磐梯スキー場 周辺	2	避難開始	大きな噴石 火砕流 火砕サージ	敷地の一部が大きな 噴石や火砕流・火砕 サージの影響範囲 (想定火口から 1 km) の範囲内に含ま れるため

6 避難促進施設の指定

火口からの距離や火山減少の影響等を考慮し、不特定多数の者が集まる施設や避難に時間を要する要支援者が利用する施設等を避難促進施設として指定する。

また、避難促進施設に指定された施設による避難確保計画の作成を支援し、本計画との整合性を確保する。

<u>施設名称</u>	<u>所在地</u>
<u>星野リゾートアルツ磐梯スキー場</u>	<u>磐梯町大字更科字清水平 6 8 3 8 - 6 8</u>

7 火口周辺規制及び入山規制の範囲

「磐梯山の噴火警戒レベル」に基づき、想定する火口周辺規則、入山規制の範囲を以下のとおりとする。

磐梯山では、北西から南東方向に延びる広い範囲に火口が分布しており、今後噴火の発生が想定される地点を 1 点に決めることが困難であることから、火口密度分布や噴気孔位置等の諸条件に基づき「磐梯山火口噴火緊急減災対策砂防計画」で設定した想定火口範囲を想定火口とする。

レベル 2 の場合における警戒範囲：想定火口から概ね 1 km 以内

レベル 3 の場合における警戒範囲：想定火口から概ね 2 km 以内

第 3 節 災害応急対策

火山災害が発生し又は発生するおそれがある場合において、災害の拡大を防止し、又は軽減するため、災害発生の際又は応急復旧に関する計画を樹立し、それぞれの計画に基づき迅速かつ的確な活動体制のもと、応急対策に万全を期するものとする。

第 1 火山災害応急活動体制

(主管) 総務課、各課

火山噴火は、突発的に発生する場合があります、初期の防災機関の立ち上がりが非常に重要である。火山災害が発生した場合、町は、速やかに災害対策本部等組織の編成、要員の確保を行い、初動体制を確立するとともに、関係機関と緊密な連携を図りつつ火山災害の発生を防御し、又は応急の救助を行うなど災害の拡大を防止するための活動体制を整備する。

町災害対策本部の設置、組織及び所掌事務並びに配備体制等については、第 3 章第 1 節「応急活動体制」に準ずるものとするが、火山災害時における初動体制及び配備基準については、次による。

配備区分	配 備 時 期	配 備 内 容
警戒配備	(1) 磐梯山において、異常現象の発生や噴火警報（火口周辺）又は火口周辺警報（噴火警戒レベル 2～3）が発表されるなど、 <u>火口周辺に影響を及ぼす</u> 噴火（爆発）のおそれがあり警戒体制を必要とするとき。 (2) その他特に総務課長又は町長が必要と認めたとき。	災害情報の収集及び伝達並びに監視のため、関係各課の所要の人員をもって当たるもので、事態の推移に伴い速やかに町本部を設置できる体制とする。
第 1 非常配備 (町災害対策本部の設置)	(1) 磐梯山において、噴火警報（噴火警戒レベル 4～5）が発表されるなど、 <u>居住地域まで影響を及ぼす噴火又はおそれがあり、</u> 人的及び物的被害が生じ、又は生じるおそれがあるとき。 (2) その他特に町長が必要と認めたとき。	関係各班の所要の人員をもって当たるもので、災害の発生とともにそのまま直ちに非常活動を開始できる体制とする。
第 2 非常配備 (町災害対策本部の設置)	(1) 磐梯山において、 <u>大規模な</u> 噴火（爆発）し、人的及び物的被害が生じ、事態が重大であると認められるとき。 (2) その他特に町長が必要と認めたとき。	災害対策本部の全員をもって当たるもので、状況によりそれぞれの災害応急対策活動ができる体制とする。

第 2 火山災害応急措置

(主管) 総務課、各課

1 災害情報の収集及び伝達

火山災害に関する情報は応急対策を実施する上で不可欠なものであるが、現場は地域的に山岳地が多くなることが予想されるため、有線による情報の収集及び伝達は極めて困難になるものと思われる。従って、町は、県、他市町村、消防機関その他の防災関係機関の無線装置を有効的に活用することによって情報の収集及び伝達に努めるものとする。

収集及び伝達する情報の事項は次のとおりとする。

- (1) 人的被害及び住居被害の状況
- (2) 要救助者の確認
- (3) 住民等の避難の状況
- (4) 噴火規模及び火山活動の状況
- (5) 被害の範囲等
- (6) 避難道路及び交通の確保の状況
- (7) その他必要と認める事項

2 監視

町長は、火山の現象により、火山地域において登山者及び観光客等の生命及び身体を保護するため特に必要と認めるときは、状況に即応した監視を行うものとする。ただし、平常時においては、県観光物産交流協会、県道路公社及び交通会社その他の火山地域にかかる関係機関に、その駐在員等による監視を要請することができるものとする。

3 避難

(1) 居住地域における避難場所（避難所）及び避難経路

磐梯山で火山災害が発生した場合に、住民等が避難する場所及び避難の経路は「磐梯山の火山活動が活性化した場合の避難計画」に定めるものとする。

(2) 火口周辺地域における避難

噴火警戒レベル 2 に相当する噴火警報（火口周辺）が発表され、火口周辺に影響を及ぼすおそれがあると認めるときは、登山者や特定地域にいる観光客等に避難を指示し、避難者を誘導する。

登山者に対して、警察等と連携し、登山届をもとに主な登山口における下山者の安否確認を行う。また、噴火警戒レベルの引上げにより、予定外の登山口に下山した登山者等を各登山口や避難所へ搬送する。

磐梯山の火口周辺における緊急退避場所及び避難方向は、以下のとおりである。

火口周辺の緊急退避場所

名称	構造・面積	想定収容人数
①弘法清水小屋	木造 30 m ²	約 15 名
②岡部小屋	木造 69 m ²	約 34 名
③磐梯山ロープウェイ駅	鉄骨造 120 m ²	約 60 名

火口周辺における避難方向



(3) 避難準備

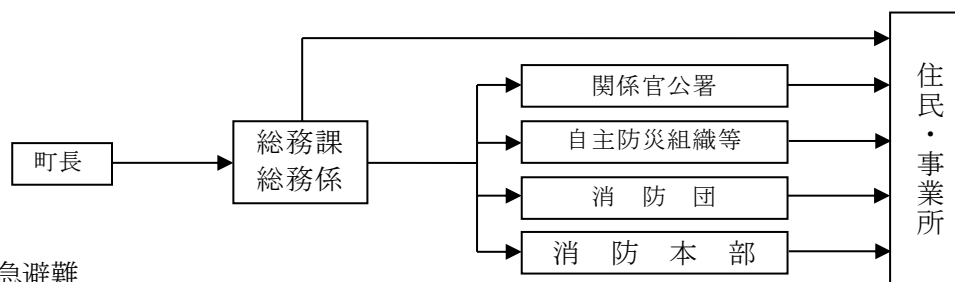
町長は、噴火警戒レベル 3 に相当する噴火警報が発表され、居住地域の近くまで災害が発生させる現象がおよぶと認めるときは、警戒が必要な居住地域の高齢者、障がい者等の要支援者に対して避難の準備を呼びかけるものとする。

また、噴火警戒レベル 4 に相当する噴火警報が発表され、居住地域において災害が発生するおそれがあると認めるときは、警戒が必要な居住地域の住民に対して避難の準備を呼びかけるものとする。

(4) 事前避難

町長は、噴火警戒レベル 4 に相当する噴火警報が発表され、災害が発生するおそれがあると認めるときは、警戒が必要な居住地域の高齢者、障がい者等の要支援者に対して避難を指示し、避難者を誘導する。これらの指示、誘導においては、高齢者、障がい者等の要支援者に対しては十分配慮する。

避難指示等するときは、避難先を明示するものとし、広報車、消防車等により地域住民に伝達する。（本事項は、以下（3）、（4）の伝達についても準用する。）



(5) 緊急避難

町長は、火山現象により、住民等の生命及び身体の保護が緊急を要すると認められるとき、又は噴火警戒レベル 5 に相当する噴火警報を受けたときは、住民等に避難を指示する。その際は、高齢者、障がい者等の要支援者に十分配慮する。

避難指示に当たっては、緊急である旨及び避難場所を付言し、諸対策に優先して行うものとする。

(6) 最終避難

町長は、緊急避難の後危険性が一時的に消滅したと認めるときで、さらに遠方に避難する必要があると認められるときは、緊急避難者に対して最終的に安全な場所への避難を指示し、避難者を誘導又は搬送する。その際は、高齢者、障がい者等の要支援者に十分配慮する。

この場合、町長は、県危機管理総室、福島地方気象台、県警察本部その他の関係機関と十分協議する。

(7) 収容

町長は、災害が長期間にわたる場合は、必要に応じて収容施設を開設し、避難者を収容する。

4 火山災害時の広報

町は、災害時の混乱の発生を未然に防止し、火山災害応急対策が迅速かつ的確に行われ、被害の軽減に資するよう広報計画を作成し、これに基づき広報活動を実施する。

(1) 広報内容

広報を行う必要がある項目は、概ね次のとおりとする。

- ア 火山情報等及び町内における災害危険区域及び避難対象地区への周知
- イ 避難指示等
- ウ 交通規制の状況等、火山災害応急対策の内容と実施状況
- エ その他状況に応じて事務所又は住民に周知すべき事項

(2) 広報手段等

広報は、広報車等による伝達ルートを用いて行うものとする。

(3) 広報の重点事項

町は、住民への広報を実施するに当たっては、次の事項に留意して、的確、迅速に行うものとする。

- ア 冷静な行動をとるべきこと。
- イ 不要な火気を始末すること。
- ウ 家具等屋内重量物の倒壊防止措置をとること。
- エ テレビ、ラジオ等の情報に注意すること。
- オ 当座の飲料水、食料品等の持ち出しの準備をすること。
- カ 自動車による移動を自粛すること。
- キ 避難対象地区として町から指定された地域以外は避難行動をしないこと。
- ク 特に必要のない限り、食料品の買い出し等の外出は自粛すること。
- ケ 特に必要のない限り、電話の使用は自粛すること。

5 救出

火山災害の現場において要救助者があるときは、市町村その他の防災関係機関又は現場にいる者はその者の救出に当たるものとする。

(1) 救助隊の編成

町長は、消防団等による救助隊を編成するほか、県警察又は災害派遣による自衛隊（派遣要請先は、知事（危機管理総室））その他の防災関係機関に救助隊の編成を要請し、要救助者の救助に当たるものとする。

特に山岳救助及び空中救助に当たっては、関係機関と十分に協議する。

(2) 二次災害の防止

救助活動に当たっては、火山現象の規模、態様等を十分に考慮するとともに、火山防災協議会（学識者、関係機関）からの技術的な助言・支援を踏まえ、二次災害の防止に万全を期して行う。

6 救急医療

傷病者に対する応急医療については、第 3 章第 1 1 節「医療（助産）救護」によるものとする。

7 交通路の確保

避難道路及び被災者の救出救助のための交通路の確保については、第 3 章第 1 2 節「緊急輸送対策」、同章第 1 3 節「警備活動及び交通規制措置」及び同章第 1 7 節「被災地の応急対策」によるものとする。

8 警備活動

火山の噴火等に伴う公共の安全確保及び各種犯罪の予防、取り締まり等の治安の維持について

は、第 3 章第 1 3 節「警備活動及び交通規制措置」によるものとする。

9 各施設の対策

町は、火山災害の発生に備え、災害の発生を防止し、又は軽減するため、管理する施設、設備については、第三者（入場者）に対し危険を及ぼさないことを第 1 目標に、実施する。なお、具体的な措置内容は、施設管理者が別に定める。

（１）不特定かつ多数の者が出入りする施設

- ア 公共施設
- イ 病院
- ウ 旅館等
- エ ショッピングセンター
- オ 集会所

（２）各施設等に共通する事項

- ア 火山情報等の入場者への伝達
- イ 入場者等の安全確保のための退避等の措置
- ウ 火気使用設備の点検
- エ 施設の防災点検及び応急補修、設備、備品等の点等及び落下防止の措置
- オ 発火流失、爆発のおそれのある危険物等の点検
- カ 受水槽等の緊急貯水
- キ 消防用設備の点検、整備と事前配備
- ク 防災活動上必要な資機材等の確保
- ケ 通信手段の確認と確保
- コ その他、管理する施設、設備について特に必要な点検

（３）個別事項

- ア 病院等にあつては、重傷患者、新生児等、移動することが不可能又は困難な者の安全確保のため必要な措置
- イ 学校等にあつては、当該学校等に保護を必要とする生徒等がいる場合、これらの者に対する保護の措置
- ウ 社会福祉施設にあつては、重度障害者、高齢者等、移動することが不可能又は困難なものの安全確保のため必要な措置

第 4 節 災害復旧

火山による災害の復旧については、第 4 章「災害復旧・復興計画」に準ずるものとする。